

「東京タワーは朝鮮戦争で使われた戦車のスクラップからできている」と聞かされたら、皆さんはどう思われるでしょうか？

私は学生の時「鉄は産業のコメである」（現在では半導体がそれに取って代わったようですが）と習いました。自動車の車体も、建物の鉄骨も鉄筋も、家電製品の外装も鉄でできていましたから、いちいち磁石でそれを確かめた当時の私は非常に納得した覚えがあります。また鉄は鉄鉱石とコークス（石炭の蒸し焼き）から作られるとも教えられました。

しかし、そうした天然資源から製錬（高炉法といいますが）した鋼材が使用された後に発生する鉄スクラップ（鉄くず）を原料にして再度鋼材を作る方法（電炉法）もあります。

冒頭で触れた東京タワーには、そのようにして生まれ変わった鋼材が一部に使用されているのです。さながら仏

民報 サロン

教でいう輪廻（りんね）転生のように、鉄という資源は何度も何度も形を変えながら私たちの役に立って来ています。銅やアルミニウムといった素材も同様です。そう思えば、今を生きる私たちが使用している資源は、先人たちが残してくれた遺産であり、さらにいうなら未来を生きる次の世代へ引き継

時空を超える資源循環



荒川 健吉

クルを事業として営んでまいりました。伝え聞きますが、創業の頃は古着・古道具に加えて人毛や獣毛など求められるものは何でも扱ってきたそうです（ちなみに人毛はかつらの材料、獣毛は筆や、はけに用いられたようです）。

私たちの生きる社会全体を人体に例えれば、静脈が全身に張り巡らされた毛細血管から始まるように、静脈産業も微細なところから始まります。皆さんが空き缶を捨てた瞬間から、新聞を読み終わった瞬間から、また新たなリサイクルのバトンリレーは始まります。その第一走者は皆さん、私たち静脈産業の従事者は第二走者です。その後第三走者、場合によっては第四走者を経て、

ぐ財産でもあります。私にはこの営みが「時間と空間を超えた壮大なバトンリレー」のように見えるのです。

申し遅れましたが、私は喜多方に本社がある荒川産業で代表を務めております荒川健吉という者です。当社は一八九三（明治二十六年）年の創業以来四代にわたってさまざまな資源のリサイ

えるなら、天然の資源を採取して加工し製品を完成させ、それを広く世の中に流通させて消費する流れは、心臓から動脈を経て全身の細胞に酸素・栄養素が供給される流れになぞらえることができるでしょう。

仮にこの一連の経済活動を「動脈産業」と呼ぶならば、逆の流れとして全この世界の片隅でバトンリレーの一端を担う人間の話に、しばしお付き合いいただければ幸いです。（喜多方市宇屋敷免、荒川産業社長）

おそらく四十代以上の方は記憶だと思いが、缶飲料(缶ジュースや缶ビール等)のフタ(プルタブ)はかつて缶本体から完全に分離するものだった。中身を飲み終わった後の空き缶に切り離れたプルタブを入れてごみ箱に入れると、カラカラと音がした記憶が、私にはある。

まだ昭和だった一九八〇年代、このプルタブがボイ捨てされ、海岸で子どもが足を切ったり、野生動物がこれを飲み込んで死亡したり、といった事例が問題となった。こうした状況を背景として、プルタブの素材であるアルミの資源価値に着目した人々が「アルミは大切な資源なので、プルタブを集めてこれを換金し、世の中の役に立てよう」と考えた。

彼ら善意の人々は、そのお金で車いすを購入し、病院や福祉施設に寄付することにした。環境問題の解決が福祉の増進にもつながる。分かりやすく、

民 報 サ ロ ン

しかも美しいストーリーだ。結果として多くの人々がこの運動をさまざまなかたちで支援した。著名人では歌手のさだまさし氏も自身のラジオ番組でこの運動を紹介し、プルタブの回収を呼び掛けた。全て善意から始まった話だった。

時が平成に移ると、缶飲料はフタを

ま「アルミ缶そのもの(空き缶全体)」を集めるよう啓発を続けている。

しかし、人々の記憶には「プルタブが車いすになる」という「物語」が根強く残った。この運動はなお余喘(よぜん)を保っているが、私は資源リサイクル業界に身を置く人間として、現状ではアルミ缶のフタは付けたまま集

善意から始まった話

荒川 健吉



開けても缶本体からタブが分離しない「ステイオンタブ」方式が主流になった。これによってプルタブのボイ捨て問題は物理的な解決を見た。現在、多くのアルミ缶関係業者が加盟するアルミ缶リサイクル協会では、タブ部分だけを無理に切り離して集めるのは非効率かつ危険だとして、タブは付けたま

めてもらうのが最良であると考え。歴史は繰り返さないが、しばしば韻を踏む。平成の半ばから始まった「エコキャップ運動」は、ペットボトル飲料のキャップ部分の素材が再生プラスチック原料として経済的価値を持つことに着目した人々が、これを集めて換金し、世の中の役に立てようという善

意から始まり、最終的にはポリオワクチンを途上国へ贈ることに帰着した。環境問題解決が国際貢献にもつながる。これまた分かりやすく美しい「物語」だ。しかし現実には往々にして物語を裏切る。一時は理想的と思えた仕組みが、時代の変化により一夜にして意味を失うことがある。エコキャップ運動もまた、回収費用の問題や資源価格の不安定さからその有効性に疑問の声が絶えない。

当社は現在、ワクチンの寄付先である「世界のこどもにワクチンを日本委員会(JCV)」のパートナーだが、この仕組みを持続可能なものとして維持していくためには不断の努力と細心の注意が不可欠だ。私は先人たちの善意に敬意を払いつつ、全ての資源に最適な循環の道筋を付けるために、現実との格闘を続けたい。それは現実に対抗し得る物語を語り直す試みでもある。

(東京都多摩市宇屋敷、荒川産業社長)

賛否両論あった今夏の東京オリンピック・パラリンピックを見ていて感じたことがあります。それは「どんな競技でもそのルールを知らないに興味を持って観戦できないし、その時点でのスコアが分からなければ面白みが半減する」ということです。無論例外もあって、アスリート個人に強い好感を持っていけば、それだけで興味関心を維持できて、会場の熱気や観客の反応だけでも十分に競技を堪能できる場合もあるでしょう。

しかし、もし自身がアスリートであるにもかかわらず、自身が参加している競技のルールもスコアも知らされていなかったとしたらどうでしょうか？ 私は以前、人数合わせでルールも知らない状態でマージャンに参加させられたことがあったのですが、これは大変苦痛な体験でした。何をしたら良いのか分からない、良かれと思ってしたこと怒号や嘲笑、舌打ちが飛ん

民報 サロン

でくる。果たして自分が勝っているのか負けているのか分からない…不安と恐れを感じました。

これだけなら単なる笑い話で済むのですが、さてこれを経済分野で考えてみた場合、例えば「アスリート」を「会社員」に、「競技」を「事業・ビジネス」に置き換えてみたらどうでしょう

百年の孤独

か？

一九七六（昭和五十一）年、既に世界的な家電メーカーへと成長を遂げつつあったソニーで同様の思いに駆られた人がいました。井深大氏と並ぶソニーの創業者・盛田昭夫氏その人です。彼は、一社員であっても会社全体の経営のルール（企業会計原則）とスコア

（会社の業績を示す財務諸表）を理解した上で仕事をすることが、社員本人と会社全体の成長と幸福実現に資するという信念から「楽しくゲーム形式で経営のルールとスコアを学べる研修」の開発を号令しました。

その結果誕生したのが「マネジメン トゲーム研修（以下MG研修）」です。



荒川 健吉

いわば「社長の人生ゲーム」とでもいうべきこのゲームを、当社が社員研修の必須科目として取り入れて十年以上が経過しました。成果は漢方薬のようにじわじわとではありますが、表れてきているように感じています。

近年では志を同じくする企業と連携して「ふくしまMG研究会を設立し、

県内でのMG研修の普及啓発を進めています。今月二十三、二十四の両日は警梯町のコワーキングスペースLiving Anywhere Commons会津警梯にて、町内外の事業者の方々にご参加いただき合同でMG研修を開催しました。講師の中には会計事務所の先生方に並んで、インストラクターの資格を持つ当社の社員の姿も見ることができ、感無量でした。

「誰もが自らの人生の経営者である」というのが私の持論です。一人でも多くの方にこの研修を体験していただくようこれからも活動を続けていきます。ところでソフトバンクの孫正義社長はMG研修のマニアで、「この研修の中で、百年分の経営をやると人生観が変わる」と述べられたそうです。不肖にして私はまだ百年に至りませんが百期の経営を終えた時、どんな風景が見えるのか今から楽しみです。

（喜多方市宇屋敷免、荒川産業社長）

一五八九（天正十七）年に起きた摺上原の合戦は、独眼竜・伊達政宗が会津の章名氏を破り南奥州における覇権を確立した戦いとして名高い。

この時敗れた章名氏の家臣で、主君の危急を救うため力戦奮闘して戦死した三名、金上盛備・佐瀬種常・佐瀬常雄の忠誠を後世に伝えるために建立された石碑が「三忠碑」（さんちゅうひ）である。この碑は今も磐梯山南麓の裾野に寂然と端座している。

意外なことに、碑が築かれたのは一八五〇（嘉永三）年、ペリー来航の三年前である。摺上原の合戦から実に二百六十年が経過したこの時期に、なぜ三忠碑は建てられたのか？

ここからは私の想像になる。碑の建設を命じた会津藩主・松平容敬公は京都守護職を務めた容保公の先代である。一般的なイメージでは、会津藩は一八六二（文久二）年の京都守護職拜命をきっかけにして歴史の表舞台に登

民報 サロン

場したと考えられがちだが、外国船の来航が相次いだ文化・文政期を通じて会津藩は北方警備で樺太に駐留し、また江戸湾の警備に当たるなど既に国事に奔命（ほんめい）していた。「なぜわれわれだけが？」そう思うのが人情だろう。あくまで私の想像だが、容敬公はそうした声なき声への回答として

歴史から何を学ぶか



荒川 健吉

当社の仕事の一つを歴史との対話の売する。そこで発生した収益の一部を積み立ててオーナー団体（これも育成会など）に分配するとともに、基金を造成し外部有識者の審査を経て地域で活動する非営利団体へ運営協力金として贈呈するという取り組みで、今年で十八年目を迎える。ちりも積もれば何とやらで贈呈金額は累計で一千万円を超えた。

私はこれを初代会津藩主・保科正之公が設置した「社倉」（しゃそう）の現代版だと考えている。社倉は穀物を備蓄する倉庫で、非常時に備える一方で平時においても必要に応じて地域に還元された。

三忠碑を建立したのではあるまいか。摺上原の戦いで敗れた章名勢ではさまざまな理由から離反者が多く出た。しかしその中でも忠義を貫いた先人たちがいた。容敬公は過去の歴史の中から自らの指針となるべきものをそこに見いだしたのだと私は考える。

中で語ってみたい。リサイクルボックスというサービスがある。二十四時間・三百六十五日利用可能な資源物回収拠点で、当社事業所に隣接して設置している。

住民の方が古新聞・古雑誌・段ボールや空き缶などを持ち込み、当社はそれをリサイクル原料として加工して販

学生時代、私の恩師は「歴史とは現

（喜多方市宇屋敷免、荒川産業社長）

二〇〇八（平成二十）年、北京でオリンピックがあった夏に中国を訪れる機会があった。当時日本から中国へ大量に輸出されていた「雑品（ざっぴん）」と呼ばれる低品位な資源商品の受け入れ先の地域（寧波・台州）の様子を裏見してこようという趣旨の視察だった。

広大な敷地に日本から運ばれてきた雑品が足の踏み場もないほど並べられ、大勢の人々が地べたにうずくまり、手作業で解体作業を行っている様子に衝撃を受けた。日本の資源リサイクル施設で見ると、作業着・保護員を着用している人は皆無で、老若男女を問わず普段着のまま粉じんにまみれて作業に従事する姿が強く印象に残った。

「あれは公書の輸出ではないか？」
と思い至ったのは、帰国後しばらくたってからだ。しかし、資源バブルの様相を呈していた当時の中国は、諸

民 報 サ ロ ン

外国から品質を問わず資源商品を買って付けた。私が見た光景も適法な商取引の結果だったので、釈然としないながらも自らを納得させるしかなかった。

その三年後に東日本大震災が起こった。私が住む喜多方では直接的被害はなかったものの、物流の混乱や東京電

おん しゅう 恩讐の彼方に

荒川 健吉



害者の方々に仕事を与えられない一方で、日本から大量の資源商品が（時に環境負荷を伴って）国外に流出している現実には憤りのようなものを感じた。これには私憤もある。いわゆる就職氷河期に社会に出た私は、就職活動が思うに任せず社会から「お前は必要とされていない」「お前の代わりは他にい

源循環を促進させる仕組みを作ろうと決意した。幸いにして少なからぬ賛同者を得て事業主体となるNPO法人を震災の翌年に設立することができた。現在では同法人の運営する施設に毎日二十数人の障害者の方々が通所し、継続的に資源リサイクル作業に活躍されている。特定の作業に限っては健常者以上の能力を発揮する方もいて驚かされることも多い。

今月一日には喜多方市内にグループホームを開設した。障害のある方が共同生活を送る施設で、親元を離れても地域で自立した生活が送れる仕組みを構築することが目的である。ここまで来られたのは周囲の理解や支援とスタッフの努力のたまものであり、心から感謝している。

もしタイムマシンがあるなら、二十年前の自分にこう言いたい。「お前の活（い）きる場所は必ずある」と。
（喜多方市宇屋敷免、荒川産業社長）

力福島第一原発事故への不安で落ち着かない日々を過ごしていたある日、地元で福祉施設を営む方から「障害者の就労支援施設で受託していた仕事が多くなり困っている」という話を聞き、中国で見た情景がにわかに私の脳裏によみがえってきた。

「くらでもいる」と言われたように感じていた。当時の自分と望んでも仕事を得られない障害者の方々の姿が重なり、彼らの意欲に込められる場所を創りたいと痛切に思った。

私はこれを契機に環境と福祉の連携によって障害のある方々に地域で就労機会を提供するとともに、国内での資

努力は必ず報われると信じている。宝雲山大龍寺は臨濟宗の古刹(こさつ)で、会津若松市東郊にある。境内

には信濃国(現在の長野県)の戦国武将・小笠原長時の墓所があって、私は以前から「なぜ信州の武将の墓が会津にあるのか?」と疑問に思っていた。

その答えを、私は大学進学先の長野県松本市で得ることになった。小笠原長時は隣国の戦国大名・武田信玄との戦いに敗れ諸国を流浪しつつ捲土(けんと)して重来を期していたが、会津の領主・輩名氏の下に身を寄せていた折の一五八三(天正十一)年に同地で客死した。

そのため会津に長時の墓所があるのだが、皮肉にもその死の直前、本能寺の変に伴う混乱に乗じて長時の嫡男・貞慶が信濃の旧領を奪還していた。貞慶は長年待って本懐を遂げたことになんぞその地の名を「松本」と定めたと伝わる。心待ちにしていた故郷への

民報 サロン

帰還を目前にして異郷の地に果てた長時の無念はいかばかりか察するに余りある。

以上の経緯を私は松本城で知った。その数年後、社会人となって仕事で福岡県北九州市に滞在していた私は、休日何気なく訪れた小倉城で意外な事実を知る。江戸時代の小倉藩主は小笠

小笠原始末記

原氏で、初代藩主・小笠原忠貞は前述の貞慶の孫に当たる人物だったのだ。私は奇妙な縁を強く感じた。

この時調べて深く印象に残った事績を挙げたい。小笠原長時・貞慶親子は諸国を旅しながら小笠原家に伝わる礼法を各地で伝授していた。これが元になり今日の「小笠原流礼法」が生まれ、

私たち日本人の礼儀作法の基本形が形成された。また、小笠原諸島の発見者と伝わる小笠原貞頼は長時のひ孫とされる。貞頼には不明な点が多いが、仙

台藩士・林子平が著書『三國通語図説』で「小笠原島」と島名を記し、これが各国語に翻訳されるに及んで「小笠原」の名称が国際的な呼称となった。

荒川 健吉



いが、それでも努力は必ず報われるのだ。

当社は現在、資源リサイクルや廃棄物処理を中核的な業務としつつも、障害者福祉や農業法人、自動車教習所など多様な事業を行う部門をグループに抱えている。私はこのありようを喜多方の北方に鎮座する飯豊連峰になぞらえて「連峰経営」と呼んでいる。富士山のような高く美しい「つ峰も良いが、私は富士山ほど高くなくとも個性豊かな山々がお互いを引き立てあうように並び立つ飯豊連峰の姿が好きだ。

小笠原長時とその一族は日本史を大きく動かした英雄とは言えない。しかし彼らが生きた時代のなかで、その時成し得る限りの最善を尽くした結果、時間と空間を隔てた現代にあっても私たちは彼らの生きた証しを(礼儀作法や地名の中に)見ることが出来る。「い

つ」「どこで」報われるかはわからぬ(喜多方市宇屋敷免、荒川産業社長)